

学位請求論文審査要旨

報告番号 乙 第 号

氏名 原 圭寛

論文題目 アメリカにおける初期近代大学の学士課程編成に対する「イエール報告」の影響についての歴史研究

審査担当者

主査 慶應義塾常任理事・慶應義塾大学名誉教授

修士（教育学） 松浦 良充

副査 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会科学研究科委員

修士（教育学） 眞壁 宏幹

副査 日本大学文理学部准教授

博士（教育学） 間篠 剛留

学識確認 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会科学研究科委員

修士（教育学） 眞壁 宏幹

1. 本論文の概要

本論文の目的は、アメリカにおける学士課程編成の歴史において、知識の獲得・蓄積と能力の育成の関係がどのように語られ、それが実際にどのようなカリキュラムとして反映され、現代にいたっているのか、について検討することにおかれている。その題材として本論文では、1828 年にイエール・カレッジから刊行された *Reports on the Course of Instruction in Yale College*（通称「イエール報告」）をとりあげ、それがその後、アメリカにおける初期の近代大学とされるコーネル大学およびジョンズ・ホプキンス大学の成立と、そこでの学士課程編成にどのような影響を与えたのか、という問題を中心に検討を行っている。

イエール報告に関する先行研究では、同報告は、19 世紀前半のアメリカにおいて古典的なカレッジの課程を時流に反して擁護した文書であるとか、あるいはむしろ当時のニーズに応じて従来のカレッジ課程に対して新たな意味づけを行った文書である、とも評されてきた。しかしアメリカ大学・高等教育の通史全般において、同報告はその後のアメリカにおける小規模カレッジの隆盛に影響を与えるにとどまるとの見解や、あるいは同報告及びこれに依拠したカレッジ課程がアメリカにおける近代大学の登場に際して様々な葛藤を引き起こした、との捉え方が示されてきた。その前提として、同報告において記述されている「精神の陶冶」という概念が、能力心理学に基づく形式陶冶と同意のものとして捉えられ、これが知識の獲得・蓄積よりも重視されるべきであると主張している、との解釈が存在していると本論文の著者は考えている。

これに対して本論文は、(1)イエール報告のカリキュラムの枠組みは、その後のアメリカ

における近代大学の成立にどのような影響を与えたのか、という点を最終的な研究課題として設定する。さらにこの点を検討するために、(2)イエール報告における精神の陶冶と装備の関係及びカレッジの位置づけの再検討、さらに、(3)イエール報告執筆までの時期に、イエールにおいてどのようなカリキュラム改革が進行していたのかについての検討、という2つの予備的研究課題を設定する。

これら3つの研究課題に対して本論文では、次の3つの仮説を提示して検証を試みる。

①イエール報告における「精神の陶冶」という概念は、後の近代大学設立の基礎となり、特にカレッジの課程は近代大学の中心となる研究部門及び専門職養成の各部門、すなわち大学院課程 (postgraduate) の基礎として位置づいた。

②イエール報告における「精神の陶冶」という概念は、「精神の装備」と対置されたものではなく、むしろ前者が後者を包含しており、そのうえでカレッジ課程を近代大学の基礎として位置づけようとしていた。

③イエールにおいてはエズラ・スタイルズ学長期以来、カレッジの上位に神学・法学・医学の専門職養成課程設立を企図し、そのためにカレッジのカリキュラムを修正してきた。

そのうえで、イエール、コーネル、ジョンズ・ホプキンスの3機関について、年次カタログや報告書等のカリキュラムに関する文書をもとに、その変化を追うカリキュラム史研究を遂行する。またそれを主軸としつつも、カリキュラム編成に携わった当時の学長や、これに影響を与えた教授らの文書について、その執筆者の出自、同一機関内でのそれまでの改革動向、社会背景等をもとに改めて解釈作業を行う。それによって当時のカリキュラム編成の意図やそのモデルを探ることで、これらの検討を行っている。

2. 本論文の構成

【目次】

序章

第一節 本研究の背景

第二節 イエール報告

第三節 先行研究検討

1. アメリカ高等教育史全般の研究動向
2. アメリカ高等教育カリキュラム史の研究動向
3. これまでのイエール報告の通史上の位置づけと解釈

第四節 本研究の課題と方法

1. 先行研究の問題点と本研究の課題
2. 本研究の方法

第一章 中世の大学から17世紀のアメリカへ

第一節 中世大学の起源と教授内容

1. ヨーロッパ大陸
2. イギリス
3. 中世ヨーロッパにおける学生にとってのリベラル・アーツの意味

第二節 ピューリタンの新大陸移住と2つのカレッジ

1. ピューリタンの入植とハーバードの創立
2. イェール・カレッジの創立
3. トマス・クラップと18世紀イェールのカリキュラム

第二章 エズラ・スタイルズの「大学計画」とイェール・カレッジの教育課程の変容

—カレッジ教育課程における法学導入の意味、1777-1795—

序

第一節 「大学計画」と「シビリアン」

1. 「大学計画」の目的とその概要
2. 「大学計画」における「シビリアン」の意味
3. モデルとしてのボローニャ大学とパドヴァ大学

第二節 カレッジにおける法学の意味

1. イェール・カレッジにおける法学教育の導入
2. カレッジにおける神学教育の展開

第三節 法学的知見に基づく指導者養成

—独立戦争時のアメリカにおけるカレッジへの社会的要請—

1. 神学から法学への知識体系の移行
2. 法学を取り込んだ神学：「組合教会制」モデルにおける「法学知識人」

小括

第三章 グラデュエイト・レベルの課程の構築

—イェールの専門職養成課程、1795-1826—

序

第一節 イェール・カレッジと医師養成

1. イェール・カレッジにおける化学教授職の設置
2. イェールの医師養成部門とコネチカット医学会
3. アメリカの医学教育史とイェールのケース

第二節 イェール・カレッジと聖職者養成

1. イェールにおける聖職者養成
2. アンダーバーの設立とイェールにおける聖職者養成の変化

第三節 イェールにおける法学教育の展開

1. カレッジ課程における法学とロースクールの登場
2. イェール・カレッジとロースクールの提携

第四節 専門職養成部門設置後のイェール・カレッジの課程の特徴

1. イェール・カレッジの課程
2. 他カレッジの動向

小括

第四章 イェール報告（1828）の解釈とイェールの戦略

—知識の教授を含み込むものとしての「精神の陶冶」—

序

第一節 古典語不要論の起こりと選択制カリキュラムの登場

1. 古典語不要論の隆盛と各カレッジの対応

2. 選択制カリキュラムの起こり
3. ドイツにおける形式陶冶論の登場とアメリカにおける展開

第二節 イェール報告の概要と論点の「ずれ」

1. イェール報告の概要と構成
2. イェール報告の主要な論点
3. 論点の「ずれ」

第三節 「精神の陶冶」の解釈とイェールの戦略

1. 「精神の陶冶」の構造とイェールの戦略
2. カレッジ教育の効果に関する言説の多様性とその相互の連関

小括

第五章 イェール・カレッジと近代諸科学

—古典語必修課程と科学スクールの関係に着目して、1847-1861—

序

第一節 イェール哲学・技芸部門とサイエンティフィック・スクールの設立

1. サイエンティフィック・スクール設立までの経緯
2. 各コースの学校段階上の位置づけ

第二節 イェール報告とサイエンティフィック・スクール

1. イェール報告における「カレッジ外の教育」の扱い
2. 「農業・工業教育の詳細」としての応用化学コースと工業コース
3. 「第4のスクール」としての一般コース

第三節 カレッジの学士課程から「大学」へ—2つの類型—

小括

第六章 コーネル大学における学士課程の編成

—グループ・システムと古典語必修課程(1)—

序

第一節 カレッジから大学への「転換」

第二節 開学当初の組織とホワイトによる課程編成

1. 開学の経緯と学科・課程の構造
2. 開学当初の学士課程の特徴

第三節 ホワイトによる学士課程の考え方

1. 課程の階層性と学士課程の位置づけ
2. 学士課程の履修形態と古典語に対する考え方

第四節 コーネル大学学士課程とイェール・カレッジ

小括

第七章 ジョンズ・ホプキンス大学における学士課程の編成

—グループ・システムと古典語必修課程(2)—

序

第一節 ジョンズ・ホプキンス大学の組織と学士課程の科目構成

1. ジョンズ・ホプキンス大学開学までの経緯
2. 学士課程の設置とボルティモア・シティ・カレッジ

第二節 ギルマンによる学士課程の考え方

1. 課程の階層性と学士課程の位置づけ
2. 学士課程の履修形態と古典語に対する考え方

第三節 ジョンズ・ホプキンス大学学士課程とイエール・カレッジ

小括

終章

第一節 本研究の要旨と結論

第二節 アメリカ高等教育史研究に対する意義

第三節 日本の高等教育政策に対する示唆と今後の課題

補論 “Discipline of the Mind” の訳語の問題 — “Bildung” との比較から—

序

1. キリスト教的文脈での “Bildung” と “discipline”
2. イェール報告におけるドイツへの言及
3. アビトゥーア試験規定（1812）と “Bildung”

小括

附表：本研究関連事項の年表

文献一覧

一次資料

1. 未出版資料
2. 報告書
3. 刊行済み資料及び再版資料

二次資料・その他資料

初出一覧

【各章の要約】

第一章では前史として、中世ヨーロッパにおける大学から 17 世紀アメリカのカレッジに至るまでの学士課程の変遷の概略が記述される。ここでは、能力心理学に基づく諸力の拡張、すなわち「形式陶冶」という考え方が近代の産物であり、中世においては「形式陶冶」か「実質陶冶」かの区分は無かった、という点が確認される。

第二章及び第三章は、研究課題(3)についての検討である。

第二章では、アメリカで初めてヨーロッパ型大学の移入を試みる計画であるスタイルズによる「大学計画」（1777）と、その後のスタイルズ学長期（1778-1795）のイエール・カレッジのカリキュラム改革が検討される。

第三章では、スタイルズを継いだティモシー・ドワイト（学長在位：1795-1817）とジェレミア・デイ（学長在位：1817-1846）の学長在任中におけるカレッジ卒業生向けの医学、法学、神学の各専門職養成部門の設置と、これに伴うカレッジのカリキュラム改革について、年次カタログや両学長の論考などをもとに検討される。これにより、イエール報告執筆時までに、イエールにおけるカリキュラム改革では、結果的に「形式陶冶」と「実質陶冶」の考え方が、相互対立しない形で併存していたことが確認される。そのうえで、エズラ・スタイルズ学長期以来、カレッジの上位に神学・法学・医学の専門職養成課程設

企図され、そのためにカレッジのカリキュラムが修正されてきたことが明らかにされる。

第四章は、研究課題(2)についての検討である。ここでは第二、第三章で得られた知見をもとにイエール報告の本文が分析される。そのうえで、スタイルズの「大学計画」以来の一貫した方針に沿って同報告は、カレッジの目的として精神の「陶冶」と「装備」という2つの概念を提唱しつつ、後者を前者に包含させた、ということが論証される。

第五章では、後にイエールに設立される哲学・技芸部門及びサイエンティフィック・スクールが、同報告との関係でどのように位置づけられるかが検証される。そして同報告がカレッジの課程を、専門職養成や同時期にドイツの大学で成立した「哲学部」の基礎として位置づけようとしていたという点が、法人理事会の議事録や年次カタログ、当時の学長の論考などをもとに明らかにされる。

さらに第六章・第七章は、研究課題(1)についての検討である。ここではアメリカにおける研究大学の嚆矢とされる二つの大学について、第六章でコーネル大学を、第七章ではジョンズ・ホプキンス大学がとりあげられる。先行研究において両大学は、イエールの古典語必修課程を「否定」したとされる。ただしコーネルの初代学長アンドリュー・D・ホワイト及びジョンズ・ホプキンスの初代学長ダニエル・C・ギルマンはともにイエールの卒業生であり、両者は同じ教室で学んでいた。そこで当時のカリキュラム、大学のカタログ、学長報告書等の史料をもとに、イエール報告にみられる「精神の陶冶」概念が、後の近代大学設立の基礎となり、特にカレッジの課程は近代大学の中心となる研究部門及び専門職養成の各部門、すなわち大学院課程の基礎として位置づいたという点が明らかにされる。

これらの考察により本論文では、イエール報告を19世紀中葉以降に出現した研究大学における学士課程カリキュラムの理論的基盤として定位し、アメリカにおけるカレッジ課程の歴史を書き換えることを試みた、と著者は主張する。

3. 本論文の評価

本論文は、アメリカ大学・高等教育史において、特にカレッジの学士課程のあり方や理念・目的、さらにカリキュラムに関する研究や議論の際に必ず言及されると言ってもよい、文字通り「古典」的な史料である「イエール報告」を対象として、著者独自の観点から、綿密な検討を加えている。本論文の意義として積極的に評価できる第1の点は、アメリカ大学・高等教育史の根幹に位置づくこの題材の分析・検討に挑戦的に取り組み、従来の歴史像への大胆な問題提起（「書き換え」）を試みようとしているところである。

アメリカでは植民地期にイギリスをモデルとして、古典的リベラル・アーツから構成される学士課程カレッジが導入された。その後、時代の変化や社会的な要請をふまえて、いわゆる実学（実業・実務的教育）や近代科学を採り入れながら、多目的で多様な形態の大学・高等教育機関が発展した。さらに19世紀の後半には、主としてドイツの大学の影響を受けて、学術研究機能や専門職養成課程を備えた学士後（postgraduate：大学院）課程・組織を擁する近代大学としての「ユニヴァーシティ」が設立されるようになる。それによって、いわゆる多機能・多形態の大学・高等教育機関を包摂する「アメリカ型大学」モデルが構成され、現在に至っている。

この一連のアメリカ大学・高等教育の歴史的展開過程のなかで、「イエール報告」は、本

論文の著者によれば、従来の先行研究やアメリカ大学・高等教育史の通史叙述において、古典的学士課程カレッジの擁護もしくは再定義を試みる文書であった、とされる。本論文は、この伝統的な把握（通説）に異議を唱え、同報告が、近代大学において備えられるようになった学術研究機能や専門職養成課程の基礎をなすものとしてのカレッジの役割を準備することを企図したものであることを、著者なりの独創的な観点から論証している。その結果、アメリカ大学・高等教育史の従来の捉え方や枠組みに対して見直しを迫る挑戦的な問題提起となっている。

この論証の根幹をなすのは、同報告における「精神の陶冶」と「精神の装備」という二つの鍵概念の再解釈とそれに基づく、同報告の大学・高等教育史における再定位である。この再解釈の論点については、すでに上述した本論文の概要において言及されている通りである。著者は、同報告の綿密な読解によって、両概念が対置されるものではなく、前者が後者を包含する関係にあることを明らかにした。その際、同報告そのものの詳細な文献学的研究はもちろんのこと、同報告の刊行に先立つ前史におけるカリキュラムをはじめとする諸改革や構想、さらにそれにかかわる学長等の関係者が残した文書について、第1次史料を活用した考証に取り組んでいる。さらには同報告刊行後の、イエールにおける諸改革についても、カリキュラム改編のみならず組織編制にかかわる歴史的な変化に関しても考察範囲に収め、多様な第1次史料に基づいた分析によって、信頼性と実証性の高い検証が行われている。さらにはイエール報告の影響を検討するために、19世紀後半に「ユニヴァーシティ」として設立されたコーネル大学やジョンズ・ホプキンス大学のカリキュラムが参照されるが、その際も当該大学に関する第1次史料が駆使されている。本論文を積極的に評価すべき第2の意義は、こうした確実な実証的史学方法論の採用にある、と言える。

さらにこのことにも関連して、本論文の第3の意義として、大学・高等教育史研究としての視野の広さおよび領域横断的な研究が展開されていることを指摘できる。本論文の考察の中核をなすのは、前述したようにイエール報告における概念とその企図の再解釈である。その意味では、大学・高等教育における（教育）思想史・哲学的な分析が核となっている。また当該概念が、「形式陶冶」と「実質陶冶」という教育理論史上の概念とかかわるところから、本論文では、その考察を中世ヨーロッパの大学史まで遡及させ、イギリスや植民地期アメリカの大学・大学高等教育史にも論及し、さらにはイエールやコーネル、ジョンズ・ホプキンスのカリキュラムの史変遷に関する実証的研究、さらには「ユニヴァーシティ」の形成をめぐる大学・高等教育の組織・制度史、特に専門職養成課程にかかわる組織的な発展についても論及がなされる。このように、本論文は、単なる（教育）思想史・哲学的研究のみならず、それを中核としながらも、そこで得られた概念的考察を、実証的な歴史研究、カリキュラム史研究、大学・高等教育の制度・組織史などに関して、しかも比較史的な観点をふまえた重層的な研究領域と方法を採用しており、その学術的な視野の広さについても意義あるものと評価することができる。

ただしこうした本論文の意義は、従来の大学・高等教育史研究や（教育）思想史・哲学研究の視野の狭さを克服しようとする意欲的な試みとして積極的に評価できるとともに、その挑戦的な性質から、同時に課題を内包するものであるとも評することができる。

第1の課題は、「イエール報告」に対する従来の解釈や大学・高等教育史上の位置づけの再定位をめざすあまり、同報告に関する先行研究や通史理解について単純な図式化した枠

組みで捉えてしまっているのではないか、ということである。これまで対置的に捉えられてきた「精神の陶冶」と「精神の装備」という概念について、前者が後者を包含するものである、との再解釈は説得的なものであるとしても、そこでは依然として「陶冶」と「装備」の二項対立図式が維持されているように思われる。さらには「陶冶」は古典的学士課程カリキュラムにおける能力育成に対応し、「装備」は知識の獲得として近代大学の学術研究機能や専門職養成課程に対応する、という単純な把握は大学史の実態に該当するのだろうか。論文審査員からは、古典の学びにおいても知識が獲得されることはあるだろうし、近代大学の科学的な研究やそれにもとづく専門職養成には、探究的な能力育成の要素もある、ということが指摘された。こうしたことにかかわる理論的な整理や近代大学における教育・学修・研究の実態に関するよりきめ細かな歴史的検討が今後必要になるであろう。

このこととも関連して第2の課題として、本論文の「イエール報告」の再解釈・再定位の鍵を握る「専門職」養成についても、同様の課題が指摘できる。本論文では、「専門職」概念の内実がどのように変化してきたのかについての明示的な議論がなされていない。大学・高等教育史において「専門職」とは、伝統的に神学（職）・法学（職）・医学（職）をさすことは明らかであるが、その職が必要とする知識や能力は、時代の変化とともに変容しているはずである。中世ヨーロッパとアメリカの19世紀、さらには現代において、その内実是不変でないはずである。科学・学術研究についても同様である。「イエール報告」が、近代大学の形成を準備したとしても、それがどのような科学・研究であり、専門職養成にかかわったのか、より実態に即した詳細な検討が必要になるであろう。

第3は、補論における議論である。これに関しては、本論文の核心的な検討対象である「陶冶」概念に関して、英語における discipline とドイツにおける Bildung との関係について議論されている。短い記述であるが、ドイツ思想史研究の立場からは、同論考における Bildung 概念の検討については一面的な議論になっており、イギリス経由の古典教育における discipline、(古)人文主義の Bildung、さらには新人文主義の近代的な Bildung 概念の比較検討が必要である、との指摘があった。

4. 審査結果

以上の諸課題は、本論文の意義と表裏一体のものであり、本論文の価値を損なうものではない。それよりも意義として評価される本論文の議論が深められることによって、さらに浮き彫りにされた発展的な課題として捉えることもできる。本論文が大胆にめざした、「イエール報告」の再解釈・再定位によって、アメリカ大学・高等教育における、現代に至るまでのカレッジ学士課程の歴史を書き換えようとする挑戦的課題は、本論文において到底完結するものではない。イエール、コーネル、ジョンズ・ホプキンス、さらにハーバードなどのアメリカ東部の大学にとどまらず、また20世紀のアメリカ大学・高等教育史の発展過程全体も視野におさめなければならない。本論文はそうした研究課題を提示することも含めて、高度の専門的学術性を備えており、博士（教育学）学位を授与するに相応しい論文である。審査員一致して、これを認めることができることをここに報告する。

以上